

WOMEN'S

NEWS

2003 APRIL

VOL. 42

SPORTS

FOUNDATION



第1回全日本女子アマチュアボクシング選手権
(フォート・キシモト)

JAPAN

Message	社会の理解をるために 三ッ谷洋子	2
インタビュー	精神面から選手を支えるメンタルスキル・コンサルタント 田中ウルヴェ京さん	3
Opinion	女性スポーツとマスコミ 畑 律江	6
Women's Sports	JWS設立の目的と活動 小笠原悦子	8
	ブライトン宣言とは	9
Column	Lリーグを目指す「美人」サッカーチーム(中) 本田美登里	9
会員の広場	蓮見直子 金子和子 後藤忠弘	10
事務局便り		11

社会の理解を得るために

1月末に出席した座談会で、とても興味深いお話を聞きました。これは「スポーツと文化」(発行:日本体育・学校健康センター、秩父宮記念スポーツ博物館)という冊子の創刊号用に企画されたもので、「オリンピックに未来はあるか」がテーマでした。

「女性の時代は終わった」

近年のオリンピックでは日本の場合、男性より女性の活躍が大きく取り上げられるようになってきました。この席上で、オリンピックに長年スポンサーとしてかかわっている松下電器の担当者、井谷直樹さんに、スポンサーの姿勢としての対応について質問してみました。

これに対して、井谷さんは「スポンサーの世界では、女性、女性といっても、今ごろ何をいつてるのか、と思われるのが関の山だ」と答えられました。広告の世界では「女性」という切り口はとっくに終わっているということでした。

さらにびっくりしたのは、選手をサポートする場合、「男性と女性では違いがある」ということです。「男性より女性のほうが、気持ちよくサポートできる」のだそうです。

「アトランタオリンピックで敗退したヤワラちゃん(田村亮子選手)は、負けてから一層、人気が出てきましたよね。女性選手は負けても『よく頑張ったね』となるけれど、男性だと『何だ、この野郎』となるんです」

つまり、同じように試合に負けても、消費者は女性選手には励ましの拍手を送り、男性選手には罵声を浴びせる—という正反対の反応が見られるというのです。なぜ、違いが出るのか。こんな大衆心理が生まれる原因を、ぜひ知りたいものです。

一方、私の仕事の分野であるスポーツ業界や、理事や委員等としてかかわっているスポーツ界は、一般の社会に比べ女性の進出が非常に遅れています。

その構造が旧態依然としており、組織の中核にいる人々が、女性の意見を反映させること

で、一層の発展が可能であることに、思い至らないからだ、私は思っています。

急激に変化している今日の社会において、スポーツの世界もそれに対応し、変化しなければなりません。そのときに必要なのは、社会で半数を占めている女性や、未来を託す次の世代の意見に、耳を傾けることです。

田嶋陽子は勘弁して

私自身は女性として、折に触れて「女性が意見を言える機会を増やしてください」と、発言するようにしています。

スポーツ界の重鎮が集まったパーティーでこう言うと、ある男性から「でも田嶋陽子みたいなのが出てきたら大変だよ」と反論されました。それからしばらくして、今度はスポーツ団体の会議で隣席の男性が、「女の権利とかいって、田嶋陽子みたいなのは、ごめんだ」と、同様のことを口にしました。

男性主導の日本の社会において、女性がその能力を正當に評価されるのは、並大抵のことではありません。

欧米社会にくらべ、その大変さは男性の「3倍」、場合によっては「10倍」ともいわれます。能力のある多くの女性が、日々の生活の中で頑張っています。そんな女性の鬱憤を、威勢のよい物言いで晴らしてくれたのが、テレビの中の「田嶋陽子」だったようです。

それにしても、短期間に2度も彼女の名前が語られたことを不思議に思いましたが、それほど一般の男性に対して、大きなインパクトを与えているということなのでしょう。

私は、一方的に持論をまくし立てる彼女の姿が好きになれず、また政治家としての姿勢にも疑問を持っています。

しかし、「女性として」などと意見をいうと、このように短絡的に捉えられる一面があることも、また事実です。女性の行動や実績が、これからは厳しく問われ続けることを、覚悟しなければならぬようです。

精神面から選手を支える

メンタルスキル・コンサルタント 田中ウルヴェ京さん



東京・白金台にて

スポーツ選手にとって一線を退くとき、その後の進路決定が大きな問題となります。1988年のソウル五輪シンクロナイズド・スイミングで銅メダリストとなった田中京(たなかみよこ)さんは、メンタルスキル・コンサルタントという道を選びました。結婚された現在、シンクロ界・スポーツ界だけでなく、様々な分野の人たちを対象に活躍している田中さんにお話を伺いました。

(4月11日=聞き手:高橋昭子)

私を救ったメンタルスキル

— 現在、メンタルスキル・コンサルタントをしていらっしゃるのですが、カウンセラーとは違うのですか。

田中 カウンセラーや臨床心理士は、心理的にマイナスになっている状態からもとの状態に戻すのが仕事ですが、メンタルスキル・コンサルタントは、普通の状態の人をよりプラスの状態に変えていくために、コンサルティングをします。

スポーツ選手の場合は、試合に勝つため、実力を発揮するための、いわゆるメンタルトレーニングです。

— 実際には、どのようなカウンセリングをしていらっしゃるのですか。

田中 例えば、会社勤めの人ならプレゼンテーションをする時、ピアニストならリサイタルで実力を発揮できるように、トレーニングをします。

最近増えているのは、リストラされる人、された人のためのコンサルティングです。

スポーツの世界でいうと、相撲の力士や、Jリーガーの現役引退後のことを考えるためのコンサルティングをしています。

— 現役が対象なのですか。

田中 現役選手だから、そこまで考えなくてもよいと思われがちですが、あえて考えることで、今の選手生活に、より前向きに取り組める。目標がクリアになるので、現在すべきことがやりやすくなります。選手をやめた後も精神力を培えるという指導をしています。

— ところでメンタルスキル・コンサルタントになろうと思われたきっかけは。

田中 ソウル五輪後に現役を引退してバーンアウト(燃え尽きて)してしまい、身も心もボロボロで、何をしようかあまり考えられませんでした。ただ流れでシンクロのコーチになりました。大好きなシンクロの指導ですから、とてもやりがいがありました。やっていたうちにコーチとは単に技術的な指導だけでなく、心理面の指導がと

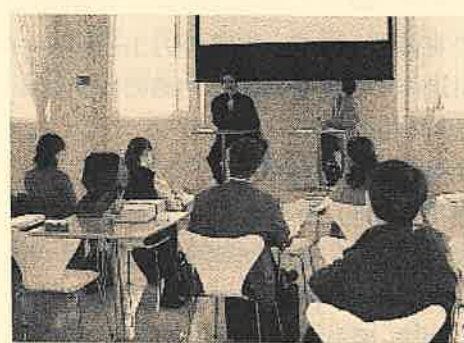
でも重要なことに気づきました。

コーチである自分自身が成熟していなければいけない。哲学を持ち、リーダーシップのスキルも必要。でも、自分にはそれがないことをつくづく感じました。20代前半だったので無理もないことでしたが、心のことをもっと勉強しなければいけないと感じました。

そんな時、JOC（日本オリンピック委員会）の派遣でアメリカへコーチ留学をしました。ここではじめてスポーツ心理学があることを知りました。集中力や、やる気を出す方法など、自分が今までやってきたことそのものに理論がある事を知ったのです。これはシンクロだけでなく、ほかの競技にも伝えられるべきものじゃないか、そう思ったのがきっかけといえはきっかけです。

— コーチとしての勉強をしていくうちに、メンタルスキル・コンサルタントに興味を持たれるようになったのですね。

田中 何しろその勉強をすることで、自分が一番救われました。現役を引退して本当にボロボロになっていましたから。こんなに悲しいことは他の選手に経験



一般の人を対象にしたレクチャーも（奥の右側が田中さん）

してほしくない。勉強していることを活かして、後進の指導ができたらと思いました。

時間は圧縮パックのようなもの

— 毎日、仕事でお忙しいようですが、ご家庭との両立はどのようにされているのでしょうか。

田中 選手のときは24時間、全てが自分の時間でした。でも、結婚して24時間が自分のためだけの時間ではないことに気づきました。2児の母、妻、コンサルタント、シンクロの解説と様々なこ

とをしています。本当に分刻みで動いています。

時間で圧縮パックのようなもので、つめればつめるだけ空く部分も出来るんです。忙しいというのは認知の仕方であって、そう思ったとたんにストレスになってしまいます。まだ食事をする時間がある、トイレに行く時間もある、と思えば楽に感じます。

「認知の中ではマイナス要素を入れない」。イライラする時間ももったいないですよ。自分にとって幸せだと思うチョイスをしたら、言い訳をしないことです。

— ご家族の協力はいかがですか。

田中 主人がとても助けてくれます。彼もとても忙しいんですが、それでも夜8時までに帰ってこようと努力してくれるし、子供と遊んでくれます。私が仕事をすることに對して、とても支援してくれます。

お互いに家族が第一という約束を大事にしています。仕事と家族・家庭にそれぞれの程度比重をおくか、バランスのととり方についてよく話し合います。主人とは5分でも話そうと努力しています。

フェアの大切さを学んだ「女性スポーツ」

— アメリカと日本では、スポーツに対してここが違うと思うことはありますか。

田中 特に「スポーツと女性」について、アメリカではあんなに問題になっているとは思いませんでした。大学院に「女性とスポーツ」のテーマで1つの講座があることに驚きました。日本にいたときは、シンクロ競技ということもあり、特に差別を受けたことはないし、女性だからといってハードルがあるとは思っていませんでした。

アメリカでタイトルIX（教育修正案第9条＝教育における性的差別の禁止を規定）を知って平等の必要性がわかりました。もし、私がレスリングやラグビーをしたくなったら、当然、平等という話が関わってくるのだと思うと、すごく関心が出てきました。“女性に対する平等”という考え方

を学びました。

本来、人間には男も女もないと思います。生物的なところが違うのですから男と全く同じ、イコールにはなれませんが、フェアでなければいけない。男だろうが女だろうが子供だろうが大人だろうが、フェアでなければいけないと思います。



見た目第一の報道に悩んだことも

オリンピック精神がそうであるようにスポーツにとっても、フェアであることがすごく大事です。スポーツからフェアプレーを学ぶことで社会、教育、全てにつながっていくことを学びました。私にとって、それは女性スポーツから始まっています。

— そのような意識を持って日本のスポーツ界を見たとき、何か感じたことはありますか。

田中 日本に戻ってすごく嫌だったのが、メディアが外見だけで女性選手を判断するという事です。グラビアで可愛い選手がクローズアップされる。なぜ競技の上手な人ではないのか。

見た目が第一なんですね。これは日本社会の男女のシステムに問題があるのではないのでしょうか。男の人の立場から見たメディアが多い。例えばスポーツ新聞は男性読者が対象です。

男性の好むタイトル、写真はお尻のクローズアップ。スポーツ選手はタレントではありません。タレントと一緒に扱われるのは嫌ですね。

— ご自身、女性として、女性選手として、そのような経験をされたことはありますか。

田中 私がソロで優勝し、（小谷）実可子ちゃんが3位になった年ですら、新聞には彼女のほうが大きく出て、私の顔は半分しか出ないことがありました。10代の女の子としてはすごく傷つきました。鏡を見て、私のどこが可愛くないのだろうかとか真剣に悩みました。

私が勝手に比較していた面もあったかもしれませんが、メディアはもうちょっと競技重視にしてもよいのではないかと感じました。いま思えばこれって競技に対してフェアじゃないですよね。フェアに扱って欲しいですね。

現役時代、試合の記者会見でボーイフレンドはいますかといったプライベートなことを聞いたり、ケーキを我慢するのが大変ですね、などの的外れなことを言う記者がいました。

シンクロ選手は浮力をつけるため食べるのに必死なのに、何のリサーチもしていない。日本の場合は、スポーツをスポーツとしてみていないと思いました。

夢はナナハンに乗った70歳

— ご自身の現役引退後の道を選択するとき、シンクロに直接、関わらない分野で不安はありませんでしたか。

田中 メンタルがとても面白かったし、もっと勉強をしたい。メンタルスキルの仕事をするのは、自分のためにもなっています。人間的な成長には哲学が必要です。日々、勉強です。

でも将来の大きな夢は、やっぱりシンクロに関わることなんです。本当のシンクロを、エンターテイメント化したい。いつかきっと実現させたいですね。70歳くらいにはやりたいですね。

— 70歳ですか。是非、実現してください。

田中 あとナナハンにも乗りたいんです。ナナハンが無理でもマニュアル車をガンガンとばして、筋肉がしっかりした、健康でいきいきした70歳。それが出来ていたら素晴らしい。

— 楽しみにしています。

<田中ウルヴェ京さん略歴> ソウル五輪シンクロナイズドスイミングのデュエットで銅メダル獲得。1991年より渡米し、主にスポーツマネジメント、スポーツ心理学を学ぶ。現在、日本大学医学部講師、国際水泳連盟アスリート委員などを務める。著書、訳書多数。67年、東京生まれ。夫はフランス人。2児の母。

女性スポーツとマスコミ

毎日新聞学芸部副部長 畑 律江

私は子供のころから体育が苦手だった。新聞社に入ってから、スポーツとの接触といえ、支局時代に高校野球の予選をよちよちと取材して先輩記者を不安がらせただけで、あとはほとんど学芸部畑で仕事をしてきた。こんな私が女性スポーツを報じるマスコミのあり方について書くなんて、実に荷が重い。それでも、日本の新聞作りが男性側に強くシフトしていることに常々悩んできた者として、感じることはある。思いつくままに指摘してみたい。

女性とマスコミについて考える時には、常に2方向からのアプローチがあると思う。一つはマスコミで働く女性の状況。そしてもう一つは、紙面などでどのように女性が表現されているかという問題である。両方の問題は、互いに深く影響し合っている。

スポーツを報じた女性記者たち

新聞社でスポーツを主に取材するのは運動部である。生活面、家庭面は「女性向き」、運動面は「男性向き」と長く考えられてきたために、スポーツ報道に携わる女性は、かつては非常にまれだった。

そんな中、今でもその存在の大きさが語り伝えられている記者は、毎日新聞の前身、大阪毎日新聞社(大毎)で活躍した人見絹枝(1907～31年)である。優れた陸上選手だった彼女は、大毎の運動課長、木下東作の説得で入社した。人見は「自分で走って自分で書く」優秀な記者となり、当時の女性たちとスポーツとの距離を縮めた。

人見に限らず、どうやら初期の運動部の女性記者たちは、自身が優れた運動選手だったようだ。戦後間もない毎日新聞大阪本社の運動部にも2人の女性がいたが、いずれも運動選手で、中でも山内リエ(47～60年に在籍)は、戦前戦後を通じて走り高跳び、走り幅跳びなどで活躍した女子陸上界のトップジャンパーだったという。

私のような普通の女性記者がスポーツ取材を

するようになったのは、60年代ごろかららしい。64年の東京オリンピックも、女性の進出への追い風になった。だが当初は、女性記者の取材はアマチュア・スポーツや大相撲に限られた。深夜勤が制限されていたため、夜10時までには仕事を終えねばならなかったのだ。86年に男女雇用機会均等法が施行され、労働基準法の女子保護規定が大きく撤廃されてから、女性記者のプロ・スポーツ取材が本格的に始まる。毎日では87年に初の女性のプロ野球記者が誕生した。

紙面で強調される「女性」

私が入社した80年ごろは、新聞社の編集部門に占める女性の割合は0.8%程度だった。それが今では1割を超えるようになった。とはいえこの比率は、各国のマスコミと比較するとまだまだ低い。

新聞の送り手側への女性の進出の遅れは、当然、紙面上にも影響を与えてきた。普段、何気なく見過ごしている表現の中に、固定的な性別役割意識や、男女の不均衡な扱いが顔をのぞかせることがある。

まず気になるのは、特に必要がないのに職業名などの上に「女性冠詞」がつくことである。女子大生、女医、女流画家、女性市長、そして女子選手。男性が「標準」であり、女性が「特殊」だという意識は私たちの中に根強くあり、記者が何気なく使う女性冠詞にそれが表れてしまう。また女性のスポーツ選手の場合、「(伊藤)みどり」「(橋本)聖子」などと、名前がそのまま愛称になって見出しに踊るのも気になる。以前スポーツ紙などの見出しで、「小泉首相」に対し「真紀子外相」が盛んに使われた時期があったが、それと似た現象である。最近では「カズ」「イチロー」などと名前と呼ばれる男性も出てきたが、女性の場合はニックネームとして名前を意識的に流布させたわけではないだろう。

さらに、「(投手は)女房役の捕手とがっちり握手した」などといった定型表現の中に、女性役割への決めつけがのぞくこともある。

外国の女性選手の会話を訳す時に、必要以上

に「女言葉」を使わせてしまうのも、考えものである。女性が「メダルが増えたわ」「注目されたの」などと話している一方で、男性は「僕の得意技さ」「訓練してきたんだぜ」などと話している。今の日本人の会話を筆記してみても、性別による差がこれほどあるとは思えないのだが。

また、スポーツ記事の魅力は迫力ある写真だが、女性の写真は、フィギュアスケートやシンクロナイズドスイミングなどの採点競技で優遇して扱われる傾向にある。昔はよく、世界的なスポーツ大会の度に、読者の目をひくためか、美貌の女性選手の写真を集めた「大会の名花」特集が組まれたものだ。

最近では、シンクロに打ち込む男子生徒の映画が話題を呼んだり、女性が男性を膝の上のせるアイスダンスの演技が拍手を浴びたりしたが、従来の「美」の基準をマスコミも一度、見直す必要があるだろう。こうした見直しの表れか、女性を集めた「大会の名花」特集は、2000年のシドニー五輪あたりから、かなり減ってきているようだ。

男女で異なる「二人三脚」物語

さて、次に気になるのは、事実をどのような流れで報じるかという「文脈」の問題である。

近ごろはやや少なくなったものの、女性のスポーツ選手が既婚の場合、「妻・母」役割を必要以上に強調する表現が目につく。「母は強し」「ママさん選手」「ミセス好調」などとして、家事や子育ての体験から得た余裕や広い視野、夫からの愛情が、いい成績につながった、という物語が展開するのだ。

確かにこうした報道は、既婚女性を励まし、後進を勇気づける役割を果たしている。だがその反面、妻・母役割への過剰な意味づけや女性役割の決めつけにも一役かっちはいないか。男性の場合、夫・父経験が成績と結びつけられることはほとんどない。

また女性選手の場合、栄光への道のりが、厳しいトレーニングで彼女の能力を開花させた男性(多くは父親やコーチ)との「二人三脚」物語として語られることが多いように思える。

たとえば外国人男性コーチが、日本の女性選手に「お前の演技をすれば勝てる。それ以外は考えるな！」と指導したとし、「名選手の陰に名

コーチの存在があった」と結ぶ記事があったりする。コーチの命令口調は、まるでひと昔前のスポーツ漫画のようで違和感がある。これが男性選手になると、彼を陰で支え続けた母や妻との「二人三脚」物語になるケースが多い。



小出義雄監督に金メダルを掛けるマラソンの高橋尚子選手(シドニー五輪)

そもそも女性も男性も、ともに誰かに支えられ、引っ張られて、強くなったのである。その過程のどこに注目して書き込むかは記者の判断だが、そこに性別による思い込みが、紛れ込むのではないか。

女性に伝える新たなスポーツ観

私はスポーツが苦手だと言った。スポーツは「男子のするもの」で、どんな運動をしても「強く、速く、高く」ない自分はダメなのだという苦手意識があった。だが、そうした意識を育ててしまった原因の一つは、ひょっとすると、女性あまり「登場しない」スポーツ報道だったのかも知れない。

今、報道に必要なのは、生涯のあらゆる時期を通して「体を動かす」ことの楽しみを享受し、健やかな暮らし作りにつなげていけるようなスポーツ観を、女性たちに伝えていくことではないだろうか。

過去の報道の定型的な「文脈」を読みかえ、女性とスポーツとの新たな良い関係をどう作るか。これからのマスコミの、大きなテーマになるだろう。

<はた・りつえ> 大阪生まれ。1980年に毎日新聞社に入社。神戸支局を経て、82年から大阪本社学芸部。99年、夕刊編集次長。2000年から現職。

(この原稿は、2002年3月2日に開催したWSFジャパン創立20周年記念「女性スポーツセミナー OSAKA」(クレオ大阪中央)において、畑さんが講演された内容を、改めてまとめたものです。)